
IS-インフィニット・ストラトス-双子の兄は転生者

慢心王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS - インフィニット・ストラトス - 双子の兄は転生者

【Nコード】

N8498Q

【作者名】

慢心王

【あらすじ】

織斑一夏の双子の兄は転生者だった
望んだ転生ではなく磨耗しきった転生によるイレギュラーは何を成すのか

この小説は作者の自己満足などが含まれていますのでそれでも（・
・）イイ！！という方はご覧ください

クラスメイトは99・9%女（前書き）

このは作者にとっての初投稿となりますので文章が可笑しかったり
するかもしれませんが生暖かい目で見守っていただけると幸いです

クラスメイトは99・9%女

「これは……想像以上にキツイ……」
と織斑一夏は呟いた

彼の今いる場所はIS学園といい女性しか使用することのできない兵器の使用方法を教育するための専門学校であり、クラス9割の視線が一夏と双子の兄に向けられている

「みなさん入学おめでとう。私は副担任の山田真耶です」
やまだまや

そうして教室に入ってきた副担任である真耶は妙な緊張感のようなものに支配されていた教室に少し焦る

「あ……えっ、今日から皆さんは……」

今しがた教室に入ってきた副担任の声も一夏には届かない

「？？ほ、等」

彼は幼馴染である篠ノ之箒しののほうきを救いを求めた目で見るが目をそらされる
「？？秋一」
あきひさ

と隣に座っている双子の兄である織斑秋一にも視線を向けるが気づいていないようだ

「？？それが六年ぶりに再開した幼馴染に対する態度かよ、俺もしかして嫌われている。秋一は気づいてないみたいだし……」

「織斑君……織斑一夏君！」

「はっ、はい」

「あのー大声だしちゃってゴメンなさい。でもあから始まって今おなんだよね。自己紹介してくれるかな？ダメかな？」

クラスの中に笑い声が響くなんてこんなにこの先生は謝るのだろうと疑問を抱きながらはいと返事をして立ち上がる

「織斑一夏です、宜しく願います」

と自己紹介をしたつもりだったがもつと喋ってやこれで終わらないよねなどといった視線が突き刺さる

「？？いかなこれで黙ったままだと暗いやつのレッテルを貼られてし

まう

「以上です!!」

予想外の切り返しにクラス中の女生徒が意気消沈してしまっていた
「あれ・・・ダメでした!? ……ぐふっ」

焦り始めた一夏は頭を殴られる。誰かと思っておそろおそろ振り返ると

「げえ・・・関羽!!」

「誰が関羽だ、私は三国志には出ていないぞ」

そしてもう一度頭を殴られた一夏は頭を抱えながら頭を殴った人物のことを考える

おりむらちふゆ

織斑千冬職業不詳で月に数回しか帰ってこない姉がなぜここにいるのだろうと疑問に思う

「織斑先生、会議は終わられたのですか？」

「ああ山田君、クラスへの挨拶を押し付けてしまつてすまなかつたな」

今まで聞いたことのないような優しい声で話しかける実の姉

??あれ・・・俺と接しているときと違うような? ホントに千冬姉か…?

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言う事はよく聞き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠15才を16才までに鍛え抜く事だ。逆らってもいいが、私の言う事は聞け。いいな」

なんて発言だろうだがしかしこれは実の姉だと一夏は実感した
そして響き渡る黄色い声女生徒のパワフルさを実感させられた一夏は耳をおさえ音を遮断しようとするがあまり意味は無かつたそうだ
「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か? 私のクラスだけ馬鹿者を集中させているのか?」

黄色い声をあげる女子たちをうつとおしそつに見ながら呆れた声色

で言う

そんな言葉に叱ってや罵ってつけあがないようにしてなどドM全開な言葉を言う女生徒

「で、挨拶も満足にできんのか。お前は？」

「いや、千冬姉俺は??」

机に頭を叩きつけられる一夏。実の姉からのDVにも等しい行為は辛いものだろう

「学校では織斑先生と呼べ」

「わかりました、織斑先生」

このやりとりの結果一夏と千冬が姉弟なのがバレてしまったため更に一夏が注目された

「さて次は織斑兄だな。しっかりと挨拶をしろよ」

今までまともに話を聞いていなかった少年は立ち上がり

「織斑秋一。織斑一夏の双子の兄であり織斑教諭の弟だ。趣味は読書と研究。これからよろしく頼む」

と淡々とした表情で答える。

?? 特別問題はなかったようだ。このループから抜け出すことは無理か……

織斑秋一は転生者である。だがこれは神のミスなどではなく神の道楽として選ばれただけだった

最初は楽しんでいただろう。フィクション 仮想の存在と触れ合えたのだから

だが何度も何度も転生する度に精神は磨耗していき死を望むようになった。だが自殺だろうと他殺だろうとループしていき一度行ったことのある世界でも毎回似て非なる世界。どれだけ仲良くなったとしてもリセットされ続ける関係。何人も人間を殺し、英雄と呼ばれ殺人鬼と呼ばれいつだったかわからないが壊れた

彼は自身の欲望の為に行動するようになった。気分で人を殺し、気分で人を生かし、気分で人を見捨て、気分で人を救うそういった生活を続け今の世界へと辿り着いた

どれだけ肉体を鍛えて、魔の力を手に入れてもリセットされるため、

彼は全ての知識を内包した頭脳を何時しか手に入れた。世界にすぐわない技術で破滅させ、破滅より防衛したりもしていた

「次の者自己紹介を続ける」

こうしてSHRは問題もなく終了した

1時間目の授業終了後一夏は兄である秋一に話しかけていた

「そういえば、この3ヶ月どこにいたんだ？」

「ドイツで千冬姉さんの手伝いをさせられていた」

「それは……大変だったろうに」

秋一は姉である千冬に頼まれドイツで教導している姉の補佐官をやっていた

書き置きは残しておいたがいきなりドイツに行くなどと書かれた紙が1枚。電話をしても繋がらない。さぞ焦っただろう

「ちよつといいか」

「「え？」」

話しかけてきたのはファースト幼馴染と一夏が呼んでいる筈だった。屋上に向かう3人を女生徒がひっそりと後をつけていた

「何の用だよ……？」

沈黙により支配された屋上で双子と幼馴染は6年ぶりの再会をしていた

「6年ぶりに会ったんだ。何か話があるんだろう？」

「??なぜ俺はこの場にいるんだろう……」

と秋一が考えてるのをよそに一夏と筈は会話を続けていた

「そういえば……」

「な、なんだ？」

「去年剣道の全国大会優勝したってな。おめでとう」

と祝いの言葉を送る一夏に対し

「なんでそんなこと知ってるんだ!？」

と驚きを隠せないように一夏に言葉を投げかける

「なんでって……秋一が教えてくれたからな。新聞に載っていたって」

「そ、そうか」

「あーあと……」

頬を赤く染めた箒が一夏の言葉を待つ

「久しぶり。6年ぶりだけど箒ってすぐわかったぞ」

「え……?」

「ほら、髪型一緒だし」

「よ、良くも覚えているものだな……」

「いや忘れないだろ。幼馴染の事くらい」

またも沈黙が支配する

「二人共いい空気のところ悪いがもう少しで授業が始まる。戻ることを推奨する」

「そうだな。俺たちも戻ろうぜ」

「わ、わかつている……」

一夏は屋上から立ち去り箒と秋一の二人だけとなる

「箒……」

「な、なんだ。秋一?」

「一夏はまあ頑張ってくれ。鈍感な奴だが悪い奴ではないからな。なにか困ったら相談してくれ」

「あ、ああ。頼りにしているぞ」

「では戻ろう」

箒は鈍感な一夏のことが好きなのは理解している秋一は、人の恋路を邪魔する奴はなんとやらだが一夏の鈍感スキルは天性のものであるため箒の補佐役を始めたのである

余談だが秋一にもこの鈍感スキルは弱いものの多少存在しており今はもついないセカンド幼馴染に好意を持たれていたのだが気づくこ

とはなかつた

クラスメイトは99・9%女（後書き）

感想、誤字脱字がありましたら報告してください

イギリスの代表候補生（前書き）

第2話です

主人公のISの名前が決まらない……どうしよう

イギリスの代表候補生

二時間の授業中に一夏がほとんど全て意味がわからないと自己申告し姉による鉄拳制裁を受けた一夏は秋一に単語の意味を教えて貰っていた

「ちよつとよろしくて？」

「え？」

いきなり声をかけられ驚く一夏であつた。二人に声をかけてきたのは白人の女子だった。金色の髪を縦ロールにしており、青い瞳が印象に残る顔立ちをしており、一度見たら暫くは忘れることはないだろう。そして如何にも『今』の女性の雰囲気纏っている。昨今、ISの存在で女性はかなり優遇されている。女子〃偉いという構図を当たり前としている女性も珍しくない。ISの操縦者ならまだわかるがそれ以外の女性も偉いと勘違いしている女性も多い

一夏はこの手の女性が苦手であり、秋一にいたっては割とどうでもいいと思っていた

「まあ！何ですの、そのお返事？私に声をかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度という物があるのではないかしら？」

金髪の女生徒の高圧的な物言いに一夏は困ったように表情を苦くする

「悪いな。俺たち、君が誰だか知らないし」

「名前を名乗ってもらえると助かる……」

二人は女子事を全く知らない。一夏は担任が姉である千冬だったことの方がショックで、秋一は聞く気すら皆無であつたため考え事をしていたのだが、金髪の女生徒はそれがお気に召さなかったらしく、怒りを表すように目がつりあがっていった。そして男性を見下した口調で続けた。

「この私を知らない？このセシリア・オルコットを？イギリス代表候補生であり、入試主席のこの私を！？」

その名前を聞いて思い出したかの様に秋一が説明をする

「彼女はイギリスの代表候補生セシリア・オルコット。専用IS『ブルー・ティアーズ

蒼い雫』の操縦者。IS学園入学試験で教官を倒した唯一の女子だ」

「へえ、そうなんだ」

秋一の説明文に、一夏はよくこの兄は知ってるなと感心していた

「入学前に代表候補生は調べておいた……」

「あら。それは殊勝な事で」

セシリアは満足そうに頷いた。そして一夏は自分の中の疑問を投げかけた

「そういや秋一。一つ訊きたいことがあるんだけど」

「何だ？」

「代表候補生って何だ？」

周囲の女子がずっこけた。セシリアに至っては返す言葉も無いようだ
「一夏。代表候補生というのは国家代表IS操縦者の候補生として選出された者のことだ。単語から連想すれば分かるだろ？」

「おお。言われてみれば確かに」

なるほどと手を打つ一夏を見て調子を良くしたのかセシリアは

「つまり！エリートなのですわ！」

一夏の鼻先に指を突きつけ言葉を続ける

「本来なら私のような選ばれた人間とあなた達のような者がクラスを同じくするだけでも奇跡……幸運なのよ。そこところをもう少し理解していただけないかしら？」

「そうか、そいつはラッキーだ」

「……馬鹿にしていますの？」

「お前が幸運だって言っただんたろうが……」

「大体、何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待はずれですわね。そちらの方のほうが余程マトモでしてよ」

「俺に何かを期待されても困るんだが……秋一はまだしも……」

「ふん。まあでも、私は優秀ですから貴方のような人間にも優しくしてあげますわよ」

優しさにはこんな種類もあるのだろうか。あるとすれば世界は優しさで満ち溢れているだろう。夜明と一夏はアイコンタクトを交わし、セシリアを無視して席に着いた。

「わからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えてさしあげても良くてよ。なにせ私入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「俺は秋一に教えてもらうから……あれ？俺も倒したぞ教官」

兄に教えてもらうという伝えるが一夏は自分が入試で勝利したことをふと思い出した

「は！？」

「倒したっていうか……いきなり突っ込んできたから躲したら壁にぶつかって動かなくなっただけど……秋一は？」

「割と普通に勝ったぞ。楽だったな……」

「わ、私だけと聞きましたが……」

「女子だけってオチじゃないのか」

「違う……クッ」

そのことがセシリアには驚きだったようで息を荒くしながら問い詰め出した

「あ、貴方達も教官を倒したっていつの！？」

「えーと、落ち着けよ……なあ」

「これが落ち着いていられ……」

そこでチャイムが鳴りセシリアは捨て台詞の言って立ち去った

「それでは、この時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

一、二時間目とは違い、教壇に上がっているのは山田先生ではなく、

千冬だった。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦の代表者を決めないといけないな」

と、思い出したように千冬は言う。話を要約すると、戦うクラス長といったところで一年間の変更できず、会議などにも参加させられるというものである。一夏はそんな面倒ものをやりたくないので無言だった。

「はい。織斑秋一くんを推薦します！」

「私は織斑一夏君を推薦します！」

どんな世界だろうと現実はそこまで甘くない

「私もそれがいいと思います」

「では候補者は織斑秋一、織斑一夏。他にはいないのか？自薦推薦は問わんぞ」

「ちょ、ちょつと待った！？俺！？」

予想外の推薦、一夏は立ち上がってしまう。だが返ってくる言葉は「織斑弟。席に着け、邪魔だ。他にいないのか？いないのなら投票に移るぞ」

「ちょつと待ってくれ俺はそんなの……」

一夏はやりたくないと思えようとするがそれは阻まれた

「待ってください！納得がいきませんわ！」

甲高い声が教室に響く。クラス中が声の発生源であるセシリアに目を向けた。

「そのような選出は認められません！！男がクラス代表だなんていい恥さらしです！このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

「だいたい文化としても後進的な国に暮らさなくてはいけない事自体私にとっては耐え難い苦痛で……」

「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一マズイ料理で何年覇者だよ」

愛国心が高いと思われる一夏はあまりの侮辱に堪忍袋の緒が切れた

のか激しい口論をはじめた

「なっ、おいしい料理はたくさんありますわ！！貴方！！私の祖国を侮辱しますの！！」

剣呑な二人の間に走る沈黙

「決闘ですわ！！」

「おう、いいぜ。四の五の言うより分かりやすい」

「わざと負けたりしたらわたくしの小間使い……いえ、奴隷にしますわよ」

「ハンデはどのくらいつける？」

「？…あら早速お願いかしら」

「いや俺がどのくらいハンデをつけたらいいのかなあって」

クラス中に響く笑い声周りから色々言われ一夏は今更ながらヤバいと思いはじめた

「むしろこちらがどのくらいハンデをつければいいのか迷っていますわ」

「どうでもいいが……俺のこと忘れていないか。忘れているのならいいんだが……」

今まで何も喋らなかつた秋一が話に介入しだした

「そういえば貴方もいましたわね。影が薄いから忘れてしまっていましたわ」

「俺としてはそのまま忘れていてもらった方が良かったのだが……」

「それで貴方はどうなさるのかしら？」

「決闘に参加すればいいんだろ……アレの実戦の機会が多い方がいいからな」

「そうですか……それで貴方はハンデが必要なのかしら？」

「いやいらな……」

「そんなこと言っていないで織斑君達ハンデつけてもらったら？」

「男が一度言ったことを覆せるか、ハンデはいらない」

「無くとも問題はない」

と啖呵をきる一夏にたいし秋一は淡々と答える

「その言葉必ず後悔させてさし上げますわ!!」

今まで微笑を浮かべながら見ていた千冬が話をまとめる

「さて、話はまとまったようだな。では勝負は来週の月曜日の放課後に行く。織斑兄弟。オルコットは各自準備しておくように、では授業を続けるぞ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8498q/>

IS-インフィニット・ストラトス-双子の兄は転生者

2011年2月22日06時26分発行